

日本から正式に降伏の通知を受けた後の九月二日、背が高く牛の様に太い首の山下大將は山道にそつて出頭してきた。左に軍刀を持ち、彼と部下は降伏するためアメリカの戦列へ近づいた。最後の一ヶ月、アメリカ軍は三マイル前進しただけであった。ギアングン溪谷包囲作戦の中、山下はすっかり痩せていた。彼は部下に切腹行為を許さなかった。「自分が死ねば他の誰かが又責任をとることになる。」と言っていたからだ。

将校達の後から運転手などもやってきた。山下達は軍事警察(MP)のA.S. ジャック、ケン・ウーシーから収容委員と面会した。彼らがマニラ郊外にあるニュー・ピリバド刑務所へ検挙し護送するのだから。

山下は立ち止まり部下の将校が彼の後ろに並ぶまで待つことにした。レスリー・Mフライ少佐によると、後ろにいた若い兵士が前に進み出て、運んできた金の延べ棒を贈呈した。それは片側にきちんと積み重ねてあったという。すべてあわせると一トン近くにもなる。山下は軍刀を抜き取り、深くお辞儀をしてケン・ウーシー大佐にそれを渡した。五ヶ月先の一九四六年二月、ばかげた不当裁判として後に多くの議論をよぶことになるが、山下は絞首刑にされる。山下の罪状にも彼の裁判にも略奪した財宝や戦時中の略奪に係わることは、まったく言及されていなかった。彼はマニラで明らかに命令に反した岩淵の海軍兵と水兵部隊による残酷な犯罪を理由に戦犯にされた。

それはアメリカの歴史上で敗戦国の将軍を戦犯として断罪し裁いた初めての事であった。その裁判は正規の資格を持った人々で構成されたものではなく、もっぱら山下を戦犯に仕立て上げるための風評を証拠として集めただけであった。簡略な手続きで、いい加減な証拠しか集まっていない。にもかかわらずマッカーサー司令部からは早く起訴するように催促された。山下将軍の弁護チームは合衆国最高裁に訴え、二つの最高裁判決が公判の

実行を非難した。裁判官のマーフィーはこう言った。「被告には弁護のための十分な時間も与えられないまま、そして、そこに彼が戦争法の違反を認識した上で犯したのかを立証する努力もなされてないのに不法な容疑で公判をせまられている。又、それらの犯罪を知らなかったならば尚更彼に責任を負わせるべきじゃないのだ。」

別の反対者、裁判官レトレッジは、「その公判過程は、米国、英国の伝統的な慣習法や憲法全体からかけ離れている。」と断言した。

そしてトーマス・パインズの警告を引用して結論づけた。「自分達の自由を確保しようとするなら、敵対する相手に対してもその圧力から守つてやるべきです。もしその義務を放棄するならば、その人にも降りかかるような判例を作る事になる。」

山下の有罪は覆らなかつた。トルーマンへの訴えが退けられた後(彼はまったく対応しなかつた)山下は絞首刑にされた。ほとんどの人は、マッカーサーは自分を無能者にした奴に復讐を望む程度のうぬぼれ屋だったことが、山下を絞首刑に送り込む理由だと考えた。

しかし、我々は秘密の約束があつたことを知っている。山下将軍に肉体的な拷問を加えれば弁護士に知られてしまう。その代わりに部下達を拷問することにした。山下の運転手、小島カシイ大佐は特にひどい目にあつた。

彼は山下将軍がフィリピン防衛を黒田シゲノリ(繁之?)から引継ぎ、一九四四年(昭・十九)十月に満州からやってきて、以来どこへ行くにも一緒であつた。小島大佐の拷問を担当したのはフィリピン系アメリカ人、情報将校のセベリーノ・ガルシア・ディアズ・サンタ・ロマーナ、通常はサンティと呼ばれていた。彼はがっしりとして背が高く、広い額をもち、まるで柔道の黒帯のようか、又は古い緑のピンからとびだしてきたジェニー(イスラムの魔神)のようだった。先ごろまでの日本軍が残酷だっただけにサンティはその仕事が好きだった。多くのフィリピン人が残酷に拷問され殺された。町では婦女子がレイプされ、その多くははらわたを抜き出されバラバラにされた。(一応、原文どおりに訳しておきます。)ただ、サンテ

イと助手達は注意深かった。小島を殺したり記憶をなくしたりするような事はしなかった。サンティが知りたかったのは金をどこに隠したかである。彼が大佐に望んだのは、ここ数年間の間に山下をどこへ連れていったかを白状してもらおうことで、そこが即ち後日発掘される金の延べ棒や略奪品のありかなのだ。

サンティは大佐が各地点へ連れて行き入口を示し、畏の詳しい説明をすることを望んでいた。小島大佐への残酷な取調べは、マッカーサーからホワイトハウスまで飛び上がる程ビックリさせるような結果を生み、二〇世紀最大の国家機密となっていた。それはすべての公式文書を「国家機密」の項目に指定したことで今でも不明瞭なままである。

サンティのもたらした結果が冷戦中の世界でアメリカの影響力を劇的に変化させたといっても過言ではない。それほどまでに驚くべき結果なのだから、今その経過をさかのぼって見なければならぬし、詳しく細部を注意してみよう。例えば、サンティとは誰なのか、本当は誰のために働いたのか？小島大佐を問い詰めるように誰が指示したのか？

サンタ・ロマーナはCIAでもマニラでも伝説に残るほどだが、不可解なままである。彼についてCIA上級将校は、戦時中にウイリアム・ドノバン「野蛮なビル」将軍が率いていた戦略情報部の諜報員として働いていた、と暗示しながら、サンティはOSSの職員でもあったと言う。しかし、そんな事は意味のない一般論だった。彼は決してOSSの職員でないからこそ、OSSが表向き財宝の存在をあきらめていたのに彼は小島を拷問したのだ。我々は又、サンティがゴールデン・リリーの隠匿物資を知っていたのか聞かねばならぬだろう。それはとても簡単なことだった。アメリカ軍はある時から日本軍がフィリピンに略奪した財宝を隠していることを認識していた。もっとも英国や他の連合国には知らせていないが・・・。

例えば、終戦の前の年にマニラ近くのスービック湾で、米軍と一緒に戦っていたフィリピン人が荷物満載の日本病院船から金属製の箱を降ろしてい

るのを目撃している。漁師に変装した米海軍の准尉ジョン・C・バリンジャーは、フィリピン人の派手に塗装された丸木舟からその船の写真を撮っていた。その船は、本当の病院船ではなかった。船の姿を十分調べた上で海軍の情報記録と比べてみた。そして一九三七年（昭・十二）に建造された高速船富士丸と特定したが、偽の装飾が施され、横側には大きな十字が塗られていた。偽の病院船となった富士丸は秩父宮とゴールデン・リリーののためにシンガポールからマニラまで戦時略奪品を運んでいた。バリンジャーの部隊はゲリラの英雄メディナ船長に率いられ、軍用トラック群がとんでもない荷物を運んでいるあとをつけた。洞穴の中へとても重い箱を引きずっているのを見てしまった。バリンジャーはその中に何かがあるか考えもつかなかったが、とても貴重な何かであることは明らかだった。それぞれの箱をベルトを使って四人がかりで引つ張った。日本軍は洞穴の入口を封印し、偽装したあとと去っていた。

ゲリラ達は数日後、洞穴を開き、七五キログラム金の延べ棒が入った箱をみつけた。それは、それこそずらつと並んでいた。船の写真、金でいっぱいになった洞穴付近の写真は多くの同様の報告書と一緒にマッカーサー司令部のあるオーストラリアへ潜水艦で送られた。バリンジャーの息子ジェンによると、彼の父はOSSへ報告したつもりだったが、現実はそのような単純なものじゃなかったという。

数カ月後アメリカ部隊がレイテに上陸したが、バリンジャーは日本軍によるほかの財宝の移動を目撃した。今度はバグイオの日本軍司令部から重い箱をトラックが列をなして持ち出し、町外れの病院近くの地下道へ運んでいた。バリンジャーの息子ジェンが我々に言った。「当時、日本人が思っていたほどの大きな秘密だったわけじゃなかったんだ。彼らはとても慌てていたし、そんなに注意もはらっていなかった。メディナの村人達は彼らを蹴つ飛ばして、地下へ押し込み蓋をしたんだ。日本人達みんなをね。」

この行動に関する報告もバリンジャーによってOSSに連絡されなかった。この重大な機密のせいで、戦時略奪品に関するいかなる機密文書の追跡も、

嘘や言い訳やキチガイでいっぱい地下社会へ入っていくみたいにウサギの穴に落ちるようなものだ。

(不思議の国のアリスからの例えだと思っただが、底なし沼のような意味か?)

戦時中に略奪された金の延べ棒の動きを監視するアメリカ軍の努力はCIAの前身であるOSSの大きな責任だったことは事実だ。又、移されたり略奪された美術品を監視する責任をもつ特別な情報部隊もあった。例えば略奪美術調査部隊、遺跡グループ、美術品グループ、公文書などのグループだ。しかし、アジアでよりヨーロッパでのほうが効果があったようだ。

ヨーロッパと比較するとアジア、太平洋での連合軍情報機関は不完全で協力し合わなかった。とにかく、東アジアでの貴金属の略奪と輸送を追跡する努力は、地政学、文化、言語が障害となり不十分なものであった。これらの記録のほとんどはアメリカの諜報部が握り、そして次第に何処かに消えてしまった。いったい何が起こったのだろうか。

当時、ヨーロッパでのOSSは他の情報部と連携して動いていた。しかし、競争も対立も激しかった。最も凄まじい縄張り争いのひとつが、ナチスの略奪品追及の中、米国財務長官ヘンリー・モルゲンソーとスイスのOSS長官でその種の問題に大変尊大な態度をとっていたロマンチスト、アレクサンダー・ダレスとの間に持ち上がった。枢軸国の略奪品は連合国の鼻先にある中立な安全地帯に移転されていた。スイスにいたアメリカ情報員はナチの金塊を載せた二八〇台のトラックがドイツからフランス、スペインを横切り中立国ポルトガルの安全地帯へ運ばれるのを目撃している。又、スイス財閥の所有で十字が描かれたトラックが中立を装いながら金を運んでもいた。しかしながら、戦時略奪の情報収集が分断されていたため、結局それらの報告書はヘンリー・スティムソンの陸軍長官の事務所には届かなかった。

彼は略奪した金塊に格別な興味を示し、そのためにそれを考える専門金融グループをもっていた。その中に、スティムソンの特別補佐官ジョン・

マッコイとロバート・ロベット、そして顧問のロバート・B・アンダーソンの三名がいた。戦争終了時に枢軸国の略奪品をどのようにするかという問題が、一九四四年(昭・十九)七月、戦後経済を計画するためニューハンプシャー州の避暑地、ブレトンウッズに四十四カ国が集まり議論された。この議題は最高秘密とされたが、解決できそうにもない国際金融制度の中に、抜け穴と不備が存在するというをはっきりとさせた。

別の議案の中にブレトンウッズ体制がある(メディアがそう名付けた)それは金(ゴールド)の価格を一オンス、三五ドルに固定すること、さらにアメリカ人が個人として金を輸入することを禁止したものだ。この条約に署名した中立国は知らないうちに盗んだ金塊や略奪財宝を受取らないと約束してしまったことになった。ただ、ポルトガルは自分の属領(植民地)一覧表にマカオを載せることを忘れてしまった。これが結果的には都合のよいものとなり、第四章で述べたように戦争が終わるまで、マカオは不正取得した、あるいは日本軍が略奪した金の世界的な貿易拠点となっていた。ドワイト・アイゼンハワー将軍に容認されていたヨーロッパと違い、太平洋南西部のマッカーサーはOSSが彼の管轄地域でいかなる足がかりも得ることを食い止めた。

マッカーサーとその部下たちはいかなる干渉もなく自分達独自の特別作戦をオーストラリアの本部で練っていた。マッカーサーグループの情報集団はチャールズ・ウイロビーの指揮下にあった。

ウイロビーは一九二二年、ドイツのハイデルベルグで生まれ、T・シエツプ・アイデンバツハ男爵とメリーランド州バルティモアのエマ・ウイロビーとの間の私生児だった。男爵と彼女の関係は一九一〇年には気まずいものとなり、エマは十八歳になった息子と一緒にアメリカへ帰国した。そして軍へ志願し軍曹まで昇進した。彼は一九一三年、市民生活に復帰したが、資格がすぐ取れるゲッティーズバーグ大学へ入学した。将校として軍に復帰したウイロビーは、一九一七―一八年にフランスへ派遣され、ベニング要塞でマシンガンの扱い方を教えていた。その後数年間は米大使随行

員として強いドイツなまりのスペイン語を使いながらベネズエラ、コロンビア、エクアドルに赴任した。一九四〇年、リーベンウォース要塞の参謀学校を卒業した後、マツカーサーの補佐官で兵站（へいたん）長としてマニラへ送り込まれた。

当時のダグラス・マツカーサーはフィリピン部隊における米陸軍元帥であった。重々しさや権威にあこがれたウイロビーは愛国者マツカーサーに畏敬の念をおぼえた。一九四一年の半ば、マツカーサーが米軍の新極東司令部司令官になると、ウイロビーにとってマツカーサーはまるで神のような存在となった。

他のどんな性格よりも、その個人的な忠誠心に感動したマツカーサーは、ウイロビーを大佐にすると約束するとともに、情報部主席補佐官にひっぱりあげた。日本から攻撃を受けた時、ウイロビーはマツカーサーと共にコレギドールに移動し、その後一緒にオーストラリアへ行った。

マツカーサーは自分の司令を受けた範囲の情報収集と特別作戦に関して絶対的な支配を望んでいた。その様な仕事はウイロビーの適性からみるとはなはだ疑問であった。何度となく彼は戦場での判断で大失敗したが、それでも敬服しながらすりよってくる彼をマツカーサーは好んだ。

軍事史専門のケネス・キャンベルに言わせるとウイロビーは本部からの指令がないのに、命令を受けたと言っては自分の不名誉な違反行為をごまかそうと企てたと言う。ウイロビーにとって、真実などどうにでもなるのだ。

オーストラリアでウイロビーはフィリピンでゲリラ活動を行う連合国情報部を設置した。そして又日本の無線放送の諜聴、捕虜の取調べ、日本軍文書の翻訳などのために連合国翻訳通訳部門（Allied・Franslation and Interpreter Section ATIS）を始めることにした。ATISのほとんどが二世、つまり外国で生まれた二代目達だ。このケースではアメリカにいた日本人の両親から生まれた人達だった。しかしながら戦闘状態でゲリラに接近するウイロビーは、大胆さを望むマツカーサーにはあまりにも慎重すぎるこ

とがわかった。

ウイロビーを情報収集の任務から切り離すため、マツカーサーは友人であり私的な弁護士のコートネイ・A・ウィットニーに特別な作戦を伝えた。ウイロビーは腹をたてたが、マツカーサーは將軍に引き上げることで彼をなだめた。こんなことからマツカーサーの旧友ホイットニーはジョーン・バリンジャーなどから届く略奪物資報告書を読んだり、この島での諜報作戦を実行するキーマンになっていった。

OSSはこのことに関して何の役割も果たしていない。ホイットニーはフィリピンで政治と権力をもつすべての家族達と親しくしており、賢明かつ裕福なのでマニラでのコネクションはたくさんあり、特殊作戦にはピッタリだった。

マツカーサーは一九二〇年代後半、ワシントンで法科学校を卒業したホイットニーをマニラでトップのデヴィッド財閥の弁護士事務所パーキンス・エンライルに就職させた。そこは、マツカーサーの財務部門を担当し、なおかつマツカーサー自身も投資しているフィリピン最大の金鉱山の開発会社、ベンゲット社の財務も掌握していた。

真珠湾のころまでホイットニーはこの島で活躍するつもりで、政治、法律、財政的な策略などに自ら関わっていた。

彼はサンタ・ロマーナのような男達から気に入られる事が出来た。いろいろな情報源、例えば前副長官レイ・クレインなどによると、サンタ・ロマーナは一九〇七年ルソン生まれ、マルセロ・ディアズ・サンタ・ロマーナとペラギア・ガルシアの間に来た大勢の子供の一人だという。大人になり彼は、ガルシア、ディアズあるいはサンタ・ロマーナと使い分けをしてきた。セベリーノ・ディアズと名のついていた頃、富裕な若い相続人工バンジェライン・キャンプトンと結婚し、カリフォルニアで大学教育を終えている。一九〇七年、サンフランシスコに大地震と火事が起きた当時、彼女の家族はストックトン通りにホテルを所有していた。震災後、ホテルを建て直し、新しいオーナーのトレイク・ウィルシャーに売却した。（今日もそこは「キャンプトンの場所」と呼ばれ、キャンプトンのいるホテルと

いう名前になっている。)

一九三〇年代にはアンジェリーナ(キャンプトン)を連れてフィリピンへ帰り、彼女の相続財産で事業を始めた。

そこで彼は、マッカーサー、ホイットニー、アンドレアス、ソリアーノ、サン・ミゲル・ブルーベリーのオーナー、そして島の富裕層達の社交場の仲間入りを果たした。

サンティとアンジェリーナの間には三人の子供がいた。ピーター・ディアズ、メリー・アン・ディアズ、ロイ・ディアズだ。アンジェリーナは第二次大戦が始まって数週間もたないうちに自分の財産を子供に残して別居し、その後、日本軍の爆撃で死んでしまったと言われている。サンティと彼女の結婚は早々に冷え切っていた。カソリックのフィリピンでは離婚は禁止されている。一九三六年、ディアズの名前をはずし、セバリーノ・サント・ロマーナの名前を使い、サンティはジュリエット・ヘルトという可愛い教師とミンドロ島で結婚した。そしてまもなくダイアナという娘をもつけた。結婚迫る時に、彼は教師になるつもりだと言っていた。彼は重婚を犯していたのでこのようなごまかしが必要だった。

サンティは戦争中、島にいて、ホイットニーの最も役立つ情報員の一人になっていた。当然、サンティが一九四五年に小島大佐に対して行った拷問は、ホイットニー、マッカーサーの弁護士、飲み友達が公認したものだ。ホイットニーはマッカーサーの許可なしでは何もしなかったのだから、その行為をマッカーサーとその取り巻きが十分承知していたことは言うまでもない。

日本軍が降伏した時点で公式にはホイットニーの特務作戦は終了している。ウイロビーのG 2情報戦略部隊は形式上存在し続けたが、ウイロビーとホイットニーはマッカーサーについて日本へ同行した。フィリピンはホイットニー個人の権力の元であり、マッカーサーの権力の源のひとつであった。ホイットニーとマッカーサーは進行中の山下將軍の公判を細かく監視し、我々が見てきたとおり、訴訟過程でも頻繁に介入していた。彼らは又、

山下の部下に対する尋問の通達を延期している。マニラにおけるマッカーサーの仲間での鍵を持つのがジョゼフ・マックミッキングだ。彼は戦前、コートニー・ホイットニーの弁護士仲間だった。日本軍が侵攻してきた時、ジョー・マックミッキング大尉は、ウイロビー大佐の為にG 2の補佐を勤めることになった。

彼はマッカーサーと共に硝戒艇でコレヒドールからミンダナオのドール・ピニアプルへ脱出し、飛行機でオーストラリアへ向かったバターン兵士の一人である。

一九四五年、小島大佐の拷問中、マックミッキングはG 2でサンタ・ロマーナの直属の上司であり、マニラのサンティと東京にいるホイットニー、マッカーサーとの間のつなぎ役でもあった。

小島大佐が口を割り、サンティが金の延べ棒を発掘し始めると、マックミッキングは一夜で異常なほど羽振りが良くなり、フィリピンのスペイン高官、ゾーベル・アヤラ家の女相続人メルセデス・ゾーベルと結婚した。サンティの発掘が進むにつれ、マニラでの財産が激増していったジョーマックキングはアヤラ家が世界の富豪に成り上がる手助けをしながら世界中の不動産をゾーベル・アヤラ財閥が獲得するための策を考えた。ゾーベル・アヤラ家がそんなに貧乏だったとは思えないが、マックミッキングほど懐が豊かだったわけではない。今日の巨大なゾーベル・アヤラ財閥の財産の裏には、フィリピンの星であるマックミッキングという金脈が控えていたのだ。

一九六〇年代初期、マックミッキング夫妻はフィリピンで職業訓練、芸術、生涯活動を促進するアヤラ基金を創設した。これは一九八三年にサンフランシスコにあったキャンプトンホテルを買収したアヤラ財閥の動きと逆行している。ホテルは優雅でお洒落な高級ホテルに変身していった。

OSSはかろうじてサンティの拷問に関与していただけだった。山下將軍が降伏した八日後のことだ、前のOSS職員、エドワード・G・ランスデール大佐がサンフランシスコからマニラに到着し、何をすべきか探し始

めた。

ランスデールは一見愛嬌があり、興味深い性格を持つ男だが、厄介な秘境に入ってきた捕らえどころのない化け猫だ。

後に彼はアメリカ人の中で最も重要な冷戦の兵士の一人として、大きな神話の象徴となつて行く。(有名かどうかは各人の見解によるが・)

グレアム・グリーンなどの小説家は、彼をアジアに度を越したアメリカ方を推進した異常な性格の持ち主として登場させている。ランスデールは多様なキャラクターを演じつつ、常に舞台の上に立っていた。その生活がごまかしばかりなので、でつちあげた神話が現実を隠してしまっている。

そこに二つの考え方がうまれる。ランスデールはアジアの救世主だというものと、戦犯であり極右の回し者だという二つだ。(長年ランスデールと事務所を共有し、米軍事情報将校であり歴史家でもあるフレッシュャー・ブロウティは、ケネディ暗殺のときに撮られたランスデールの写真を指差して、他の人たちが確認した事は自分もそうであると断言した。オリバー・ストーンはJFKの中で変装したランスデールが大統領暗殺に関与させていた。)

ランスデールのような口からでませをいう広告屋の様な奴が、どうしてあんなに冷戦中に影響力を行使できたのかは謎のままだろう。謎を解く鍵・それは小島大佐の拷問だった。

一九四五年マニラに上陸したランスデールは三七歳のごく普通の男だった。戦時中はずっとサンフランシスコにいてOSSのためのプロバガンダを書いて暮らしていた。一九〇八年、信心深い中流家庭に生まれ、母はサイレンス派、父は敬虔な長老派だった。子供の頃、父からあらゆる宗教の教えを学び、日曜学校ではアメリカの田舎道に記されているような話をお説教として聞かされた。仕事をいったん始めたなら達成するまでやめてはだめだ。大きな仕事だろうが小さな仕事だろうが働け。やるならやる。そうでないなら全くやるな。」

四十歳になった彼は、この言葉をいつも繰り返し返していた。そうクジラの潮

吹きが三十分も続くように・・・。

CIAの現場に出るからは、フィリピン、ベトナム、日本で部下達にこのセリフを教え、秘密作戦の間の合言葉として使い、アジア秘密警察幹部には食前のお祈りの言葉として使った。

数年後サンティは、このランスデールの習慣ともいえるおまじないの言葉が気に入り、自分の遺言にすら取り入れた。

世界恐慌の間、ランスデールは軍の教育課程の中でUCIAのジャーナリズムを習得した。卒業後、ロサンゼルスとサンフランシスコの広告代理店でコピーライターとして働き、機転がきく彼は重宝された。

パールハーバーの報道を聞いた時、仕事を中断し軍に志願した。そして軍の情報部とOSSで心理戦争戦略を計画する部署に働き口をみつけた。サンフランシスコのデスクワークをしつつ、日本軍が混乱させる方法を考えて日々を過ごした。彼が「悪魔の口」と呼んだビラは日本の古い格言を使い、それを用いて日本の戦争の誤りを指摘した。「先に悪い事をした者は必ず負ける。(パールハーバーを忘れるな!)」

トルーマンが一九四五年九月にOSSを閉鎖する命令を出した時、ランスデールにチャンスがやってきた。数週間しかなく、ドノバン將軍と准將軍ジョン・マゲルダールは全職員及び海外に派遣しているOSSの雇用を守るため、他の情報局や他国の情報部、そして場合によっては世界中の各分野に秘密情報員を雇う余力のあるGEのような私企業へ、経済情報やワシントン政府のお気に入りとして移籍できる道を模索した。ランスデール大尉はマックミツキング大佐が長官を務めるウイロビー將軍のG2フィリピン部門へ転籍するチャンスを与えられた五十人のOSS職員の人だった。

マニラに着いたランスデールは戦争が終わったばかりの光景に衝撃を受けた。街は海軍少将岩淵の部隊の謀略で廃墟となっていた。おぞましい話を耳にし、過度な残虐さから日本人に対して嫌悪感をもった。

彼の一九四〇年代の日記には憎しみの言葉がいっぱいだった。一九四六年

十一月十日は「多くのフィリピン人が拷問された・・・彼らは血まみれの肉片になるまでボロボロにされ・・・」と書いてある。

彼はG2の事務所で日本軍兵士によって隠匿された金塊関連のファイルを見つけ、サンティによる小島大佐の拷問のことを耳にした。彼はサンティの拷問を指揮しながらその主導権を握った。マッカーサーチームのほとんど、ウィロビーの上級将校達は日本に行き留守だったので、ランズデーは、自分の思うままにできた。

マニラでは、G2は良くも悪くもランズデーのものになっていった。彼はフィリピン人やアメリカ人の事務局長に、日本軍が行った戦時略奪のすべての証言をファイルから抜き出し、徹底的に調査するように指令した。後日、このことに関して彼が述べている。「司令部の中で我々G2の事務所が報告書の宝を握っていた・・・私の毎日の仕事はその内容に精通すること・・・私は情報部に今までに判明している事を整理し、もっとたくさん手に入れる事を課題に与えたのだ。」

サンティは小島大佐からはるかに大きなものを引き出した。十月初旬、何日もの拷問の後、小島は口を割り、知っているすべてを漏らした。ランズデーは護送隊を組織し、サンティと小島を連れ、山下将軍が作った一ダース以上のゴールド・リリー地下貯蔵庫をたどる旅に出発した。

それらは、マニラ北方の高原、西のバグイオから中央のバエンパンの三角地帯、そしてルソン島北端、アパリなどであった。ランズデーは十月初旬に帰り、すぐにマックミッキングに報告し、急いで東京へ飛び、ホイットニー、ウィロビー、マッカーサーへ説明した。そして指令を受けワシントンへ飛んだ。ホイット・バンデンベルグ將軍の下で新しくCIG(中央情報集団)が創立される直前で、OSS最後の戦略情報局長官マグルーダ將軍へ報告した。

二ヶ月前にランズデーをマニラへ配属させたのはマグルーダだった。だからヴァンデンベルグとマグルーダは、トルーマン大統領の国家安全補佐

官で閣僚でもある海軍大佐クラーク・クリフォードのもとへランズデーを送り概要を報告させた。

トルーマンはこの発見を機密とし、出来る限り多くその略奪品を発掘しよう決定した。この段階では、どのようにしてこの内容を明らかにするか、又はトルーマン大統領が何をしたいのかをはっきりと言う事は不可能であった。

サンティの回収作業に関してはすべてが機密事項であった。マッカーサーと話し合うためにロバート・B・アンダーソンがランズデーとともに東京に舞い戻った事はCIAのふたつの異なる高官ルートから知ることができた。数日間の会議を終え、マッカーサーとアンダーソンは秘密裏にマニラへ飛び、ランズデーとサンティの案内で山中のいくつかの施設と、ルソン地方アパリ周辺の六ヶ所の地域を回った。

アメリカ軍から選ばれた技術者達とサンティは一緒だったので、数週間のうちに地下金庫のいくつかを開くことができた。そしてマッカーサーとアンダーソンは金の延べ棒がずらつと並んだ所を散歩することになるのだ。

他の施設も数カ月後には開放された。すべての回収作業が完了したのは、一九四五年後半から四七年初頭までで、二年間を費やしたことになる。この地下金庫の中身と、アメリカ軍調査員が日本国内で発見した財宝をみれば、日本軍がそれまでの数十年に東南アジアで何十億ドルもの金塊、プラチナ、ダイヤモンド、宝石を略奪したことは明らかである。

この大半は海路で、もしくは中国を通り朝鮮から日本へ到着した。しかもフィリピンにはまだたくさん隠匿されたままだ。

アメリカの公式な(新聞等)ナチス略奪金の回収高は、いまだにたったの五五〇トンにすぎない。アンダーソンはもっと別の興味深いことを知っていた。

彼の仕事仲間が見た写真には、ヒットラーがポーランド、オーストリア、フランスで略奪した金塊を積み重ね、その山のとっぺんでアメリカ兵が、それもアンダーソンの事務員がすわっていた。

連合国の指令でその写真を見ることはそれが最後となり、それ以降それに関して話すことも許されていない。

同じ情報筋の話で、ヨーロッパのある修道院の中庭にナチスが略奪した一万一千二百トンの金塊が集められたというのもある。ナチスが負けた後、OSSや他の連合国側の情報組織は芸術品や略奪された金を求めてドイツとオーストリアで捜査した。ソビエト軍団と特別部隊はロシア領域で同じことをしていた。金の回収よりもっと多くのことが美術品の回収で起こったことが知られている。

百トンのナチ金塊がドイツのマルケル近くの塩鉱から回収され、フランクフルトヘトラック護送団が運んでいたが、なぜか途中で消えてしまった。それは強奪されたのだと言われるが、修道院中庭に積まれた延べ棒がそれだったとするのが真相ではないだろうか。

こうした行動の目的が、ある時に「黒いワシ」と呼ばれる様になる最高機密プロジェクトだったのだ。

その陰謀を大統領に最初に示したのは、陸軍長官ヘンリー・L・スティムソンと戦時顧問で後の世界銀行理事長、ジョン・J・マッコイ、後の防衛長官ロバート・ロベツト、後の財務長官ロバート・B・アンダーソンだった。

スティムソンは枢軸国の持つ略奪品のすべてを世界中の政治的な基金として融資すると提案した。しかし、すべての略奪金塊の正しい所有者を決められるかどうかは困難な以上、より良い選択は回収をひとまず中止し、戦後に権力側に親しい国を救う基金設立するほうが先決だった。

これは非公式に「ドイツの黒いワシ」、後に「黒いワシ基金」とよばれた。これは、ドイツ銀行の隠し金庫から回収されたナチの金の延べ棒に刻印されていた黒いワシとカギ十字ちなんである。

何人かの情報では、黒いワシ基金は欧米で最も力のあるロックフェラー、ロスチャイルド、オッペンハイナー、ウォールバーグ等が協力したからこそ立ち上げることができたという。輝かしいウォール街の弁護士スティム

ソンは五人の大統領　タフト、クーリッジ、フーバー、ルーズベルト、トルーマンの色々な部署で働くという輝かしい経験をもっていた。しかし、その異様な経歴はもはや終わろうとしていた。彼は、一九二〇年代にフィリピン総督として赴任していたのでマニラに詳しくかった。ハーバート・フーバーは彼を州知事とよんでいた。(フーバーと同じくスティムソンもマッカーサーのことを高く評価していた)

パールハーバーの時、スティムソンはすでに七〇歳だった。陸軍省に四人の補佐官を選定する権限をもつことで大きな戦争責任を果たした。ロバート・ペテルソン(法律家で前連邦判事)、ハーベイ・バンディ(ボストンの法律家でイェール大卒)、天からの授かり者とスティムソンが呼んだ二人の機関車、ジョン・マッコイとロバート・ロベツトだ。

彼らに共通しているのは、ハリマン、ロックフェラーとの関係が密接だということだ。ロバートの父はかつて日本から南満州鉄道を買収しようとしたEH・ハリマン鉄道王の右腕をつとめていた。その父の足跡をたどりロバート・ロベツトも国際通貨の取り扱いや、援助活動をしているウォール街のブラウン・ブラザーズ・ハリマン財閥でアペレル・ハリマンと共に勤めていた。

ジョン・J・マッコイは対照的にハーバード法律学校を卒業したフィラデルフィア出身の貧乏人で、ウォール街のクラブス財閥と共同してユニオンパシフィック鉄道の買収契約で七七〇〇万ドルをかせぐ手助けをしてアペレルハリマンの賞賛を得た。(マッコイはそのような割り振りをモルガン家の指示の下に操作していた)

陸軍省で働きながらスティムソン、ロベツト、マッコイは金融界と密接にからみながら戦後のアメリカに誕生する国際安全制度の助産婦になっていた。マッコイは紛争の調停人でありプロの黒幕だった。

自分の仕事は命令系統が全く交わらないような組織全体の頂点になることだと言っている。

戦時中、彼は世界中を旅し政治家や銀行家あるいは將軍達と問題解決に努

力した。彼は舞台裏での策略に大きく関わりキエロ(古代ローマの哲学者)の言葉、「戦いのカナメは金である。」という言葉をも十分理解していた。金は冷戦においてもやはりカナメだった。頭の回転がよいマッコイは国際的な資金の収支のすべてを知った。戦後、彼はロックフェラー家とそのチェース銀行の業務を取り扱う法律会社ミルバンク・ツイードと共同し外務委員会の評議長、世界銀行理事長、チェイスの責任者、フォード財団の理事長へとなっていた。彼こそが、ステイムソンの考えを採用し現実にした人間であり、黒いワシ信託を実現した張本人だったのだらう。それに比べてロバート・アンダーソンは不運な引退だった。

一九一〇年六月四日、テキサス州ブルレンで生まれ、テキサス大学で法律を学ぶ前に少しの間、高校の教師をしていた。後に州議会選挙で選出され、一九三三年、テキサス州司法長官助手に指名される。そして翌年には州税務長官となった。何かの関連でアンダーソンは富裕層のための金融コンサルタントになり、大きな成功を夢見て政界を去った。

一九四〇年代初め、彼はテキサス中の農場や油田を所有する豊かなW・T・ワグナー遺産基金の支配人になっていた。金の扱い方があまりにも巧みなので、ルーズベルト大統領は枢軸国の略奪物資を運用する責任を持っていた陸軍長官ステイムソンの特別補佐官に任命した。

海軍のクラーク・クリフォード大佐はアンダーソンの推薦する親しい友人で、ランスデール大佐から概略の説明を受けているトルーマンの国家機密担当補佐官だった。

アンダーソンとクリフォードは協力して戦後のアメリカ政界の中で巨大な権力の幹旋屋になっていった。ステイムソンは一九四五年に現役を退き、マッコイも当時は政府を去っていた。

なのに、彼らとアンダーソンは「黒いワシ信託」の監視に関わり続けている。

前CIA副長官レイ・クラウンによると、サンタ・ロマーナが回収した金の延べ棒は「四二カ国、一七六の銀行口座に預けられた。」そうだ。

アンダーソンは非共産国を通して政治活動資金を分配しながら黒い口座を設立し世界中を旅していった。

後に我々はその幾つかを重点的に調査した。一九五三年、アンダーソンに報いるためアイゼンハワー大統領は彼を海軍書記官として顧問団に推薦した。翌年には国防副長官に昇格した。

第二次アイゼンハワー大統領時代、一九五七〜六一年の間アンダーソンは財務長官に任ぜられた。その後アンダーソンは民間の生活にもどるが、ポール・ヘリウエルが戦後構築した世界中に広がるCIAの銀行情報網に深く関与し続けた。結局これが、CIAとグルになって資金洗浄と黒い金をこつそり動かすことで大銀行のオーナーを儲けさせるためのBCCI(国際信用通商銀行、アラブ・パキスタン銀行)に関与することになっていくのである。

ウォール・ストリート・ジャーナルは「世界で最大・最高のペテン」と書いた。BCCIの大敗は、アンダーソンの支援者を畏にはめてしまうことになり、クラーク・クリフォードは起訴されることになった。

クリフォードとその仲間フェアスト・アメリカンバンク・シユアーズの代表ロバート・アルトマン、そして首都にいるBCCIの幹部達は、全面的な調査により、BCCIへ隠匿目的の政治的利益供与をした罪で起訴された。ワシントンポスト紙のベルナルド・ノジターの記事で、アイゼンハワー大統領の財務長官時代のアンダーソンが、テキサスの石油王から二十九万ドルを受け取っていたと報道されて以来、彼の名声は崩壊の一步を歩み始めた。

後に彼は脱税と資金洗浄の罪に対し州へ抗告していたが失意のうちに死亡した。

どのようにしてアンダーソンやマッコイらが黒いワシ信託を運営したのかを逆から調べることはこの本の焦点からはみだしてしまう。

まだ公開されていない書類が多すぎるので、今のところ手にした証拠と知っている関係者が今でも活躍していることで自己満足するべきである。

唯、ブレトンウッズで何が協議されたのかを知ると、我々は秘密組織の一端を見ることになる。

長いヨーロッパとアジアの戦争で打ち壊され破産した連合国各国にとって、世界経済のドル本位制をアメリカが行う以外に選択肢がなかった。経済学者は第二次大戦の終わりを世界通貨体制元年と見ていた。チューリッヒにあるBIS (BANK OF INTERNATIONAL SETTLEMENTS 国際決済銀行) が枢軸国の略奪金を洗浄しているという容疑が広がっていたため、世界の将来的な金融決済と通貨交換の役割を果たすためIMF (国際通貨基金) と呼ばれる新しい中央金融取引場を立ち上げることになった。金 (GOLD) は一オンス三五ドルに固定されており、すべての通貨はドルに対して評価付けされていた。

この事はある疑問、例えば米ドルと英ポンドの相対的な関係についての疑いを取り払っていた。英国はこの計画でアメリカの仲間だったのに、アメリカに対して深い恩義を感じていた。

一九四一年、英国は三百億ドルの戦争債務を背負ったおかげで戦後計画では後部座席においやられてしまった。

どのIMF加盟国も自国通貨が米ドルで換算される事に同意した。各国はIMFへ各国が通貨を発行するに見合うだけの十分な準備高としてゴールドと通貨を貯金した。IMFの主たる機能は一方からもう一方へ資金を一時的に移動することで、それらの通貨の価値を安定させることである。

それが世界的な組織である以上、最も重要な後援者はアメリカ政府である。連邦統計では戦争終結時点でアメリカには世界の公式な金準備高の六〇%を持つていることを表していたので、他の国の通貨を操作することが出来る立場にワシントンは置かれた。

一九六〇年になってIMFのヨーロッパ加盟国は公式なアメリカの金準備高よりはるかに超過したドルを発行していることがわかってきた。

ひとつの解決策はドルを引き下げてしまうことだ。しかしワシントンはこれを拒否した。その代わり、米国はヨーロッパの中央銀行、英国銀行、ス

イス銀行と手を結び、英国銀行が運営するロンドン金市場を開設した。その考え方はこうだ。つまり各国から集められた公的な準備金を金の私設市場に十分に投入すれば一オンス三五ドルを維持できるのではないだろうか。暫くはその様になっていった。

一九六八年になりフランスが突然、金市場から去った。英ポンドは切り下げられ、金の市場は急上昇した。ロンドン金市場を支えるため、土壇場でアメリカ空軍は金をフォートノックスからロンドンへ緊急空輸した。英国銀行へあまりにも大量の金を運んだため、金を収容する部屋の床が崩壊してしまった。それは金市場がもうすぐ崩壊する前触れだった。

ステイムソンのチームで設立された秘密の「黒いワシ信託」は戦後の経済状況の中ですっかり大きくなった。それは、区別された特別な部屋に置かれ、そこで闇金市場を作り、アメリカ政府と、関連した隠れた金融財閥にゆだねられた。

この黒いワシ信託と、デビアスに認定されているダイヤモンド協会、南アフリカのオッペンハイマー家に認定されている金協会とは確かに同じにおいがする。提供された情報によると、これら似た類は十分な理由があるからこそ存在するのであって、違った多くの顔を見せながら生き延びるのだそうだ。

ダイヤモンド協会はたくさんの原石を蓄えることができ、市場へ送る宝石の量を調節することによって相場を人工的に高く保ち、その希少性を印象付けている。同じ様なやり方で黒い金の協会は数千トンの金の延べ棒を所有し (それは公式な金の供給量よりはるかに多い) その金の影響力を秘密の不正資金として慎重に使用することで金価格を不自然に高く保っている。もし、略奪された莫大な量の金の回収を、信託されたわずかの人が知らないのなら、ナチや日本などの枢軸国に盗まれた国家や人民はそれを取り戻そうと訴えることはないだろう。

又、そんな大量に金塊が闇に存在することが議論され、大衆が知ることに

なれば一オンス三五ドルの固定相場などいっぺんに崩壊してしまうだろう。あまりにも多くの通貨がドルとリンクされ、そしてドルはGOLDとリンクされているので、世界中の通貨が急落すると金融恐慌の原因になる。

その秘密が保たれれば保たれるほど、一オンス三五ドルという金価格が長く守られ、金に連動する通貨は安定するだろう。

その間に闇のゴールドを準備金として供給すれば各国の中央銀行は強化されるし各国政府も元気になる。

準備金として闇のゴールドは、みせかけ、もしくは見せかけるような目的にのみ使うよう厳しく制限され、それらの銀行に備蓄されていた。このことは米国がそれらの国や中央銀行、有力銀行へ圧力を掛け続けることを可能にした。国家と指導者がワシントンとあまりにも長く協力し続け、冷戦で連合し続けたために眠らせていた金の延べ棒は利益供与の財政原資として使用されてしまった。現実に金の延べ棒そのものを与えるのではなく金証券やその他の金派生商品的手段で贈り物や賄賂として使うことができた。政治家、軍指導者、政治的な大物とその家族を儲けさせるための信託が創設された。アンダーソンやマッコイのような賢い男の手にかかれれば可能性は無敵だった。フィリピンのゴールデン・リリー地下貯蔵庫から延べ棒を回収すればするほど多量と多くの金の注文が中央銀行や援助団体の個人買取人から注文があったようだ。後の章で、これら非合法的な資金が巨大な賄賂として表面化したり、有名なところでは、イタリア、日本、ギリシャで選挙中の買収に（もちろん他の国でもあったであろうが）使われたたたくさんの証拠文章をおみせしよう。

幾つかの国際的な有名銀行は、その地下金庫に闇金数十億ドルを慢性的に持つていた事を明らかにしている。

あまりにもどつぱり漬かっているため、彼らは延べ棒を返却することを拒否し、さらにあるケースでは前の持ち主やその遺族の文書が偽造品と非難しそれらの人から騙し取るうとするほど中毒になっていた。

実際、ある経営者などは、もし彼らが権利を主張しようものなら、その証

書が偽物だとわめくばかりか殺人の脅迫めいたものすら与えた。

ある場合では、その様な闇の準備金の使いすぎは倒産する以外にもはやその立場をすてる方法がなくなってしまうた。

ある意味、ランスデルよりサンタ・ロマーナの回集金を上手に使った者はいなかった。最初、彼の役目はマニラでの厳格な進行係であり、ゴールデン・リリーの回収を監視し、延べ棒の在庫を調べ、スービック海軍基地が空軍のクラーク空港の倉庫へ陸送することだった。

延べ棒は陸軍の護送団、軍輸送機、軍船などにより十分な機密を保ちつつ移送されねばならなかった。アイゼンハワー大統領がアンダーソンを海軍長官に任命した理由のひとつがこれだったのだ。

この大量な延べ棒の運搬は積荷明細書や保険明細文書で確認されている。そして何年分かの多くの書類により関わっていた個人名、ブローカーの名前、そして延べ棒を船積みしてどの有名な銀行に運ばれたのかも明らかである。この船積みのは後の章でのべることにしよう。文書はすべてCDに収納してある。

ウィロビー將軍は人を見る目がないのでランスデルを単なる自惚れやとして嫌っていた。だからフィリピンでランスデルをG2副長官にした時、も一九四七年まで少佐に昇進させなかった。新しくできた中央情報部長官、ホイット・バンデンベルグ將軍はランスデルを空軍に転籍させ彼を救出した。

コロラドの戦略情報学校で数ヶ月過ごした後、空軍中佐に昇進した。そしてフィリピンには空軍大佐として送り返され、CIAの気違いと呼ばれていてそして、OPC (OFFICE of POLICY ORDINATE) 政策調整事務所) という汚い策略を練る部門の長であるフランク・ヴァイスナーの為に働くことになった。ランスデルは急速な昇進を果たした。普通であれば彼の成功は新しい独立国家でラモン・マグサイサイをアメリカ人にしてしまふほど手なづけることに成功したためだと言われるが、ランスデルの誇張された成功は、共産主義のフク団の暴動を阻止した事とされていた。

フク団は富裕なスペイン人や華僑の地主にこき使われた世代による貧乏な田園の抗議行動ただけで、フィリピンの真実を知っている人は誰もその筋書きに納得しなかった。

フク団の連中はマルクスについて(共産主義なんて何も知らなくて、欲深い地主に対する戦いを支援するあらゆる抗議活動に参加しようとしていた。常に広告屋であるランズデールは撮影クルーに村を舞台としたフィリピン特別部隊によるでっちあげ攻撃をフィルムに収め、次の日にはよく訓練されたマグサイサイの「村の自由」を上演した。

これではまるでハリウッドではないか。
何がランズデールを偉大な冷戦の名士にしたのかはほんの少ししか知られていない。知られている方法とは、彼の仕事、即ち山下の運転手への拷問、サンタ・ロマーナの発掘回収、そして「黒いワシ信託」を利用したことだ。

彼は中年時代を諜報員として生きてきたので、ワシントンで起こった全てを全部自分の仕事だったと信じさせ、権力を持つ男だとみせかけることは簡単なことだった。敬虔な中西部の家族と古めかしい教訓話彼の魅力であり、彼のアジア改革のためにはアメリカのおおいなる使命があるのだという非現実的な発想はアレン・ダレス、ジョン・フォスター・ダレスがまじめな顔して広めていたが、彼等こそアジアの体験がなく、ワシントンでもっと知るべき人達だったのだ。

ランズデールが日曜の夜のパーティーでダレス兄弟と意気投合したのはラッキーだった。マニラの米大使レイモンド・スペランズへ送られた書簡にはアレン・ダレスはランズデールを「俺達の友達」だとよんでいた。ダレスは一九四五年にランズデールをベトナムへ送り込んだが、アイゼンハワーには「最高の男」の一人を送りますと話していた。

アイゼンハワーはランズデールのフィリピンでの冒険を皮肉めいた冗談ときつい当てこすりを言いながらも楽しんで聞いていた。

ランズデールはリチャード・ニクソンとも親密だったが、それはあまり良い結果を招いてはいない。もうひとつの特筆すべき事はランズデールの目

には不敵な輝きがあり、エルマー・ガントリーと違い彼はバカだからどんな犠牲を払ってでも止めさせなければならぬと言っていた。

「The Phoenix Program」の著者、ダグラス・バレンタインは言っている。

「ランズデールはマジソン通り(広告業界のこと)の言葉を使ってボーイスカウトのようにキヤアキヤア綺麗な事を言っているが、裏側では自分のひねくれた残酷な喜びを隠しているのさ。」

ランズデールが行ったアジアでの危険な行動は例外なく高価な失敗だった。アレン・ダレスはフィリピンでのCIA活動費として五百万ドルを与えた。しかしその資金はランズデールの応援者マグサイサイに渡り彼は飛行機事故で早すぎる死を迎えた。その話は「マルコス王朝」に詳しいが彼のフク団への鎮圧は詐欺行為であると広く知られていた。

ベトナムで彼はまず千二百万ドルの闇金をばら撒き、デイエム家に還元することで盛り上がりつつあった活動を後退させ、誤った方向へ導こうとした。

彼は、この本にでてくる多くの人と同じ様に無限の秘密基金の出し入れから得られる権力を愛し、ウィロビーと同じく自分の失敗した秘密を隠すことに成功した。・・・正に国家機密の覆いが本質だ。

一九五〇年代後半、彼はフィリピンで厳選した暗殺団を伴って日本に出入りしていた。それはハンサムで冷血な暗殺者、ナポレオン・バレンチノというお気に入り達だった。ランズデールをよく知るアメリカ将校の娘は、どうして彼が日本に来たのかを語った。「フィリピンから、暗殺者としてよく知られてる人を連れてきたわ。子供だったから私は彼に興味をもったの、それと彼の銃にもね。日本では普通、誰も持っていないでしょ・・・。ランズデールの考えたことと、自分の政府が人を暗殺したこと、シヨックでがっかりしちゃったわ。」

思い返せば、ゴールドデン・リリーや黒いワシ信託の設立は楽な分野だ、彼らは単に他人の金を使う事に関わっただけなのだから。それほど多くの秘密資金が冷戦中に諜報資金として作られるその元々の目的を探るのはそ

んなに簡単ではない。

日本や、又別の国で極端な秘密ゆえ、これらの巨大な活動資金がすぐに不正な手の中に落ち、今日まででもそのままだ。その途中で多くの嘘は必要だったし、殺人ですら必要だった。サンタ・ロマーナの回収や黒い闇基金を人々に知られないようにするため戦争が終わった時、日本は瓦礫となり破産し、決して何も盗んではないのだとワシントンは主張していた。これはひどい秘密の始まりにすぎなかったのだ。

(訳者より。) 各国の中央銀行に備蓄された準備金がなくなってしまった状況は、きつとそうなのだろうが、そのメカニズムは訳していてもよく分からなかった。説明不足なのか、私の頭が悪いのだろうか。